

名古屋柳城短期大学
第6回東日本大震災復興支援
ボランティア活動報告書
2016年度



協力：被災者支援センターしんち／ふじ幼稚園

目 次

写真で綴る 2016 年度ボランティア	1
現地活動プログラム	4
名古屋柳城短期大学東日本大震災復興支援ボランティア活動の歩み	5
参加者の感想	
参加学生より	6
チーム・パティシエ	20
東日本大震災 復興ボランティアに参加して	22

種蒔き

柳城学院創設者

マーガレット・ヤング

翼ひろげた天使が
愛と心理と光明との
種子をひと粒手に持って
飛ぶのを止めて考えた。
「これが大きくなったなら、
すばらしい実がなるように、
どこへ蒔いたらよいのだろう」
救い主さま、それを聞いて、
にっこりわらっておっしゃった。
「私のために その種子を
子どもたちの心に蒔いておくれ」

写真で綴る

2016年度



東日本大震災復興支援ボランティア



準備しました



復興の第一歩



がん小屋にて



旧ふじむか稚園にて





雨の中での巡礼



明日の準備

ふじ幼稚園にて大型ペープサート

「ぐりとぐら」



本番前



いざ本番



大きなたまごにびっくり



ありがとう



ハンドマッサージ①



ハンドマッサージ②

新地町の方と「茶話会」



思わず笑顔



うたをうたいました。



児童クラブの
子どもたちから

いい笑顔です。



現地活動プログラム

現地活動プログラム

東日本大震災 復興支援ボランティア 2016 名古屋柳城短期大学		
	8月28日(日)	8月29日(月)
	センターしんち・がん小屋 被災地巡礼	AM特別茶話会 PM掃路
6.00		
7.00		
8.00	集合(昼食持参)【名古屋駅の時計】	打ち合わせ
9.00	名古屋駅発(08:42発) のぞみ110号	出発準備 勤労青少年ホームへ移動 新地町 勤労青少年ホーム 茶話会準備 ふじ幼稚園へ移動
10.00		【ふじ幼稚園訪問】 大型ペープサート上演
11.00	東京駅着(10:23着) 東京駅発(10:44発) 昼食(車中) はやぶさ15号	勤労青少年ホームへ移動 【月曜特別喫茶】 新地町 勤労青少年ホーム 月曜特別喫茶(茶話会) 昼食
12.00	仙台駅着(12:16着) 山脇先生合流 レンタカー手続き	仙台駅へ移動
13.00		
14.00		レンタカー手続き
15.00	新地着 センターしんち・がん小屋 【レクチャー】 【被災地巡礼】	JR窓口手続き
16.00		仙台駅発(16:34) やまびこ148号
17.00		夕食(車中)
18.00	宿へ移動 チェックイン	東京着(18:36) 東京発(18:50) のぞみ59号
19.00	夕食	名古屋駅着(20:31)
20.00		
21.00	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想 活動準備	
宿泊	ホテル みなとや	宿泊

当初の現地活動プログラム案

東日本大震災 復興支援ボランティア 2016 スケジュール予定 名古屋柳城短期大学			
	8月28日(日)	8月29日(月)	8月30日(火)
	センターしんち・がん小屋 被災地巡礼	AM決定(特別茶話会/ミニコンサート?) PM決定(学業復旧への参加/交流)	養育参加 (ふじ幼稚園)
6.00			朝食
7.00			帰宅準備
8.00	集合(昼食持参)【名古屋駅の時計】	打ち合わせ	ふじ幼稚園へ移動
9.00	名古屋駅発(08:42発) のぞみ110号	出発準備 勤労青少年ホームへ移動 新地町 勤労青少年ホーム 茶話会準備	復旧準備
10.00		【月曜特別喫茶】	ふじ幼稚園
11.00	東京駅着(10:23着) 東京駅発(10:44発) 昼食(車中) はやぶさ15号	勤労青少年ホームへ移動 【月曜特別喫茶】 新地町 勤労青少年ホーム 月曜特別喫茶(茶話会) 昼食	【①復旧会】 【②養育参加】
12.00	仙台駅着(12:16着) 山脇先生合流 レンタカー手続き	特別喫茶片づけ	仙台駅へ移動 (車中で昼食)
13.00		夕食	
14.00		学業復旧参加準備	
15.00	新地着 センターしんち・がん小屋 【レクチャー】 【被災地巡礼】	新地町 勤労青少年ホーム 【学業復旧参加】	レンタカー手続き 駅周辺で自由時間・昼食
16.00		片づけ 宿へ移動	(夕食買出し) 仙台駅発(15:30発)
17.00	センターしんち・がん小屋 【レクチャー】 【被災地巡礼】	仙台駅着(16:34) やまびこ148号	こまち22号
18.00	センタースタッフ の案内で被災地・山元 町の被災地を巡ります	ふじ幼稚園園生会・養育参加準備	養育参加(17:04着) 養育参加(17:20着)
19.00	夕食	夕食(車中) のぞみ245号	
20.00	宿へ移動 チェックイン	名古屋駅着(19:01着) 解航(18:15)	
21.00	夕食	夕食	
21.00	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	一日のふりかえり 夕べの祈り・黙想	帰宅後、引率教員に帰宅後談話の連絡
宿泊	ホテル みなとや	ホテル みなとや	宿泊

名古屋柳城短期大学東日本大震災復興支援ボランティア活動の歩み

キリスト教センター 村田康常

2011年3月11日の東日本大震災から6年間、名古屋柳城短期大学キリスト教センターでは、毎年ささやかながらも継続的な復興支援のボランティア活動を学生と教職員が続けてきました。

本学にキリスト教センターが発足して最初に実施された大規模な活動が、この大震災復興支援ボランティア活動でした。初代のセンター長だった尾上明子教授（現在は本学名誉教授）は、新海英行前学長、菊池伸二教授（現在は本学副学長）、そして就任されたばかりの松本勝事務局長とともに2011年の7月に被災地を訪れ、8月には18名の学生と教職員ならびに下原太介前チャプレンが仙台市の青葉静修館を拠点に、宮城県、福島県、岩手県を訪問して復興支援ボランティアの活動を行いました。現地で行った学生たちが秋の学校礼拝でボランティア活動の報告会を開き、多くの学生と教職員に深い感銘を与えて、次年度にもボランティア活動を継続することが決まりました。その年度の終わりには、青森県、岩手県、宮城県、福島県の幼稚園・保育所に絵本と紙芝居を送りました。

こうして始まった東北の被災地を支援するボランティア活動は、その後も毎年、夏休み期間に被災地を学生と教員が訪問して支援活動と交流を行うというかたちでつづけられてきました。また、2013年からは、福島県新地町の「支援センターしんち」で開かれる茶話会に届けるケーキを毎月作る「チーム・パティシエ」の活動が、柳城の栄養実習室やチャペルの厨房で続けられてきました。「チーム・パティシエ」のケーキ作りは、茶話会の開催場所が新地町の「がん小屋仮設住宅」、「勤労青少年ホーム」と変わっても続けられて、茶話会の方々からは毎月お礼のメッセージが届いています。

2013年には、宮城県山元町の「ふじ幼稚園」でいただいたミニひまわり「ビッグスマイル」の種を播いて育てるという活動も柳城のキャンパス内で始まりました。ひまわりプロジェクトは、小島千恵子先生のゼミから山本聡子先生のゼミに引き継がれ、名古屋短期大学の被災地支援サークル「みんなに笑顔をとどけ隊」からいただいた大川小学校のひまわりの種も一緒に育てるようになり、夏には大小のひまわりの花がキャンパス中庭や正門前の花壇を彩りました。秋の柳城祭では、新地町の広畑仮設住宅のみなさんが作った「裂き編みコースター」や、がん小屋仮設住宅の「莓一笑」の方々作った「いちごストラップ」が販売され、昨年度は「チーム・パティシエ」によるケーキが、今年度はそれに加えてコーヒーも販売されて、それらの売り上げが募金とともに被災地支援のために献金されました。

こうして継続され発展してきた柳城の被災地支援活動は、今年度、4月に熊本県を中心に大きな被害を出した九州地震の被災地支援のための緊急献金活動から始まりました。「チーム・パティシエ」が毎月のケーキ作りを続け、東日本大震災復興支援のための献金も、九州地震の支援献金とともに毎週の礼拝の際に行われました。夏休み期間には、6年目となる被災地での現地活動が行われ、14名の学生と3名の教員が参加しました。大型の台風が接近し、観測史上初となる太平洋から直接東北地方に上陸するというルートで被災地を直撃したため、私たちの現地活動は予定していた日程を急遽切り上げて、1泊2日の短い活動となりました。2日目の朝に台風の接近状況をにらみながら日程の切り上げを決定した際、訪問先の「ふじ幼稚園」も、特別にこの日に茶話会を開いてくださった「支援センターしんち・がん小屋」のスタッフの方々も、宿泊した相馬市松川のホテル「みなとや」も、時間変更、日程変更のお願いを快く受けてくださいました。そのおかげで、私たちは2日目の午前中に準備してきた活動のうち、「ふじ幼稚園」訪問と、勤労青少年ホームの茶話会への参加を果たし、昼には現地を出発して仙台駅経由で全員無事に帰宅することができました。その後、台風が東北地方を襲って大きな被害が生じているという報道を見つめながら、現地活動を行った私たちはひたすら現地の方々や子どもたちの無事を祈り続けました。

現地活動の様子や、参加した学生たちの思いは、この報告書にそれぞれの言葉で綴られています。日程変更による短い滞在期間でしたが、全員が、他では経験できない深く多様な学びを重ねたことが、その言葉から伝わってきます。現地での茶話会に参加することができた「チーム・パティシエ」のメンバーは、茶話会で実際にお会いして、ハンドマッサージをしながら親しく言葉を交わした想いを他のメンバーと分かち合いながら、毎月のケーキ作りを続けています。柳城祭でのケーキ販売・グッズ販売と募金活動はたいへん好評で、このボランティア活動を柳城生全員が共感して支えてくれていることを実感しました。

キリスト教センターの被災地復興支援活動は、参加しているボランティア学生たちを中心に、多くの方々の共感と支援によって続けられてきました。すべての方のお名前を挙げて感謝をお伝えしたいところですが、特に、「被災者支援センターしんち・がん小屋」の高木栄子さんと夏の活動まで私たちを支えてくださった松本普さん、支援センターのスタッフとして、また水曜喫茶のママとして、現地活動でも「チーム・パティシエ」の活動でも支えてくださっている加藤和子さんと三宅友子さん、日

本聖公会中部教区センターの吉川千恵子さん、「日本聖公会東日本大震災被災者支援パートⅡ 原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の池住圭さんには、今年度も引き続いて、多大なご支援とご協力をいただきました。そして、今年度もまた、現地での活動のために「メリット基金」より助成をいただきました。同基金は毎年継続してこの現地活動のために助成を続けてくださっています。深く感謝いたします。現地活動を終え後期の授業が始まってすぐの9月14日の大学礼拝では、この「メリット基金」を残されたリチャード・A・メリット第4代学長の逝去10年記念礼拝が行われ、今も私たちを見守ってくださるメリット先生を偲びました。

この被災地支援活動を通じて、何よりも、参加する学生たちが多くのことを経験し、心を揺さぶられ、考えさせられながら、人間としてしっかりと成長していきました。彼女たち・彼らの中にある賜物が多くの方々との交わりの中で開花していく姿を間近で見てきて、毎年、すばらしい学生たちと出会っているとしみじみ感じます。この実感こそ、この活動を通じて私たちにもたらされた何よりも豊かな恵みです。

ボランティアを振り返って

学籍番号：27B04 氏名：岩園 明音

2度目の東北ボランティアに参加させていただきました。2011年3月11日に発生した未曾有の大災害は、名古屋にいた私達の想像を遥かに超える被害であったことを今でもはっきりと覚えています。あの当時募金活動にわずかながら協力し、名古屋から復興を祈ることしかできませんでした。しかし、柳城に入ってから、この短大で現地活動を行っていることを知り、1年次に続いて今年度も参加して被災地の今を伝えたいと思い、活動参加を希望しました。

まず、初日は松本普さんから説明を受け、霧がかかる天候の中、被災地巡礼を行いました。活動の拠点となった支援センターのある「がん小屋仮設住宅」では、主に新地町外から避難してきた方々が生活をしています。昨年はこの「がん小屋仮設住宅」を中心に活動をしました。あの時に会った子どもたちが今にも飛び出してきそうでした。しかし、お話によると、自宅再建を果たされ既に引っ越しているなどして、2～3人の子どもしかがん小屋に残っていないということで、お家が決まって嬉しい反面、寂しさも感じました。このように、仮設住宅で生活していた方々は、次々と新しい地でスタートを切っていると知りました。

私達のような保育者を目指すものは現場に出たら子どもの安全を常に考えなくてはなりません。もし自分の勤める園、職場に大地震や津波が襲ったら自分の命を守りつつ、まだ3～5歳の子どもたちを何十人も守り、全員無事に親元へ返すことができるのでしょうか。私達はふじ幼稚園という、津波が襲った、当時地元では人気の幼稚園を訪れました。津波によって凹んだ壁や倉庫、曲がった遊具はそのままでした。私達の身長や園の送迎バスの屋根を超える高さの津波が襲った跡も見ることができました。この場所で、数名の保育者が何

十人の子どもの命を守るために必死に戦ったことを想像しようとしたが、想像をはるかに超えた事態だったことが伝わってきて、その恐ろしさに胸が痛みました。

2日目には勤労青少年ホームというところで茶話会を行い、参加する方々とお話をし、歌を歌いました。そして、柳城から毎月送っているケーキとともに、ハンドマッサージのプレゼントをしました。茶話会のみなさんが温かく迎え入れてくださって、震災当時の貴重なお話をそれぞれが聞くことができました。最後には全員が握手で別れを惜しみました。

また、新しい地で再建されたふじ幼稚園を訪れ、全園児と先生方の前で「ぐりとぐら」の劇を披露しました。私は昨年もふじ幼稚園を訪れ、子どもたちと接しました。今年も、子どもたちは、何が始まるのだろうと目を輝かせて待っていて、私達の問かけに積極的に応える姿や生き生きした反応を見ることが出来ました。震災が発生した年に生まれた子達は現在年中さんか、年長さんです。元気良く笑顔いっぱい園生活を送っているのが伝わってきました。私達も保育の現場に出たら子どもの笑顔を守りたいと強く感じながら、披露する私までもが楽しく劇を進めることができました。劇を終えると、子どもたちが、「ひまわりおやくそく」という素敵な歌と園歌を手話と共に披露してくれました。沢山の思いが溢れ涙を堪えられませんでした。柳城で育てたひまわりの写真をプレゼントにすると、園長先生を始め子どもたちはとても喜んでくださいました。遠く離れた名古屋でも繋がっているよ、ということを感じてくださることを願っています。

2年間の活動に参加する中で、繋がりを大切にしたいということ、震災を風化させないために、現地には行けなくても

名古屋で被災地の現状を伝え続けることが大切だということを感じます。そして、この活動が、保育の現場に出たときに役立てると信じて、これからも前に向かっていきたいです。

当たり前の中の幸せ

学籍番号：27B28 氏名：廣瀬 由衣

去年に引き続き今年も被災地ボランティアに参加させていただきました。台風の影響もあり、2日間という短い時間でしたがたくさんの方と関わり、お話を聞くことができました。

1日目の巡礼では、去年と同じ場所を訪れることができ、1年間の復興を感じることができました。仮設住宅で暮らしていた方々も復興が進むにつれて新しい家に移って行かれ、嬉しい反面、人のいない家も増えて、去年のことを思い出し寂しい気持ちにもなりました。

ふじ幼稚園の旧園舎では、今も変わらず残っている震災の傷跡を見ることができ、当時の様子を頭の中で駆け巡らせました。一見どこにでもありそうな普通の幼稚園の園舎。しかし、よく見ると園舎のいたるところに津波でえぐられた跡があり、園舎の中にも泥のあとがはっきりと残っていました。いつもと変わらない生活を送っていた幼稚園に突然津波が押し寄せたことを思うと、胸が苦しくなりました。バスよりも高い津波。私たちですら手を伸ばしても届かない高さの津波が目の前に突然現れた時、子どもたちはどれほど怖かったことか、考えただけでぞっとします。

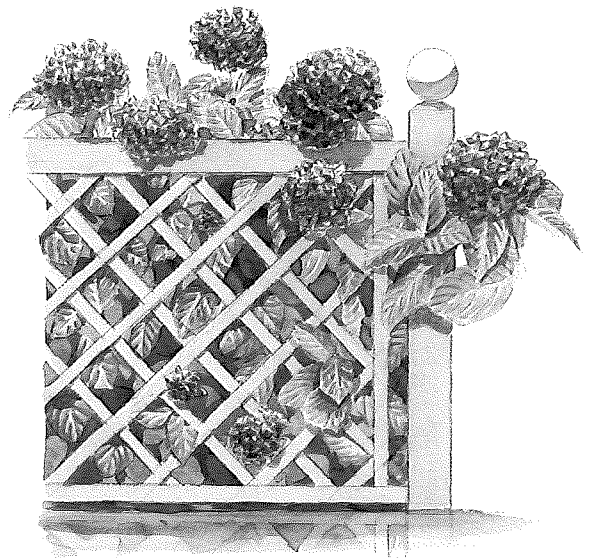
幼稚園の前には亡くなった園児や先生を想い、今でもたくさんぬいぐるみやお花が供えられています。去年まで続いていた幼稚園側の責任を問う裁判も、幼稚園側に非はなかったと判決が下り、遺族の方々とも和解できたとうかがいました。突然大切なものを失った苦しみは、決して薄れるものではなく、相手が災害とあっては怒りをぶつけることすらできません。先生方も同じように苦しんでいる、その事実を受け入れるのにも長い時間がかかるほど心の傷は深いのだと実感しました。

2日目に訪れたふじ幼稚園の新園舎では、震災を知らない子どもたちが今でも震災の時に作られた歌を歌っていて、想いが繋がっていくことを感じました。先生方がどんな気持ちでこの歌を作ったか、考えると涙が止まりませんでした。

茶話会では、ご自宅が原発の避難区域にあるために帰ることのできない方に出会い、お話をうかがうことができました。家に入るのにも許可を取らなくては入れない、家のもの

は汚染されていて持ち出すことができない、原発は本当に必要なのか、新しい家には何もなく、ひとりぼっちで寂しい、そう話す高齢の女性に、私はかける言葉がありませんでした。原発でつくられた電気を使うのは東京がほとんどなのに、なんで私たちがこんな目に合わなきゃいけないの。そう訴える女性の悲しみが手に取るように伝わってきました。本当に必要なものは何か、形だけがどんどん復興していく一方で、拾われることのない苦しみの声があることは、お一人お一人の話をうかがう中でしか見つけられないように感じました。

震災の記憶が薄れていく中で、今も苦しみと闘いながら前を向こうと頑張っている人たちがいることを、もっと多くの人に知ってほしい。耳を傾けてほしいと思いました。当たり前が当たり前ではないこと、当たりのなかにある小さな幸せを、これからも忘れないようにしたいと思います。



被災地の今

学籍番号：27C11 氏名：黒岩 栄由

2011年3月11日から5年が経過。5年経った今、東海地域に住む私たちが、東日本大震災について考える機会は、減りつつあるのが現実です。私は昨年度のボランティアに参加し、震災について考えることの大切さや、継続することの重要性を学びました。また、名古屋での活動である「チーム・パティシエ」の一員として活動する中で、このつながりを今後も大切にしていきたいという思いが強くなり、今年度もボランティアに参加することを決意しました。柳城で行われてきた今までの復興支援活動を通しての出会いを大切に、交流を深めることをテーマとし、今年度の東日本大震災復興支援ボランティアはスタートしました。

1日目は、がん小屋でレクチャーを受けた後、被災地巡礼を行いました。がん小屋でのレクチャーでは、現在の被災地について、仮設住宅について、なかなか報道されない震災関連被害についての話などを聞きました。テレビ等で知る情報ではなく、実際に現地では何うお話は、どれも心に刺さるものばかりで、復興支援活動を行う意味を改めて考えることができました。被災地巡礼では、センタースタッフの方に説明をしていただきながら、墓地や仮設の町役場、ふじ幼稚園の旧園舎などに行きました。震災当時の写真や様子を聞きながら現地を周り、実際に被災された方々のことを思うと、心が痛くてたまりませんでした。ふじ幼稚園の旧園舎では、亡くなった子どもたち、先生方を想いながら、みんなで聖歌を歌いました。津波に流されながらも最後まで子どもの命を守ろうとしたふじ幼稚園の先生。先生の保育者としての生き方や、子どもたちに対する愛、全てがこの場所にあるのだと思うと、自分も子どもの命を預かる保育者になるのだという責任感が生まれました。

2日目は、台風10号接近の影響で、大幅に日程が変更、また、その日のうちに名古屋へ戻ることが決定しました。

朝、勤労青少年ホームにて午後に行う茶話会の準備をした後、絵本『ぐりとぐら』の大型ペープサートシアターを行うため、ふじ幼稚園へ向かいました。私たちはこの劇を行うために、夏季休業中に何度も大学へ通い、準備や練習を行ってきました。私はお話を進めるナレーターの係でしたが、全学生一人ひとりに大切な役割がありました。移動中の車内でも何度も確認を行い、楽しみな気持ちと不安な気持ちを持ちながら本番を迎えました。しかし、子どもたちの前に立つと、今までの不安が消え去り、自然と笑顔になることができまし

た。子どもたちは、劇中に大きなたまごやカステラなどが登場するたびに、キラキラとした目で興味津々に私たちの劇を楽しんでくれていました。この笑顔を見たとき、私は胸がいっぱいになりました。この感覚は今でも鮮明に覚えています。劇が終わると、思ってもみなかった、子どもたちからの歌のプレゼントがありました。子どもたちがプレゼントしてくれた「ひまわりおやくそく」と園歌はどちらも震災後に思いを込めて作られた曲です。この2曲を一生懸命に歌う子どもたちの姿に心打たれました。

今年度のボランティア活動の最後は、勤労青少年ホームにて茶話会を行いました。チーム・パティシエとしての活動を行ってきたため、この茶話会に参加できることをすごく楽しみにしてきました。はじめに、茶話会に参加されているみなさんと一緒に歌を歌いました。一緒に歌うことで自然と距離を縮めることができました。また、今回はハンドマッサージとネイルも行いました。手を取ってハンドマッサージをしているあいだに、お孫さんの話から震災当時のお話、今の生活についてなど、貴重なお話を何うことができました。お話ができたのは短い時間でしたが、茶話会に参加している方々の温かさに触れることができ、とても良い経験となりました。

1年ぶりの東北の姿、車の窓から見える景色は変化しているように見えました。コンビニが建ち、道路ができ、新しい家々が並んでいる。このような姿に感動すら覚え、少しずつではありますが、光が見えてきているのではないかと感じました。しかし、本当の意味での復興は、ライフラインが整っていることや、生活できる家があることではありません。目で見える部分は変化していても、内面的には変化しておらず、メンタル面からの支援を今、必要としているのです。震災から5年が経過した今、現地でのボランティアのニーズは変わってきています。遠く離れた地に住む私たちが今できる支援はどのようなことなのか、東日本大震災を風化させないために、私たちには何ができるのかを考えていきたいです。

そして最後に、ともにボランティア活動に参加した仲間、先生方をはじめ、すべての方々に感謝致します。本当にありがとうございました。

震災に遭われたすべての方の生活に、少しでも笑顔が増えることを願い、今後も名古屋での活動を続けていきたいです。

ボランティアを振り返って

学籍番号：27C18 氏名：高島 ありさ

私は、今回初めてボランティア活動に参加させていただきました。東北には友達があり、その友達も震災にあっていました。しかし、当時の私は、何もできずにただテレビで見ていることしかできませんでした。今回、友達に直接会って支援することはできないけれど、震災にあった方々を元気付けることができたらと思う、このボランティア活動に参加しました。

1日目は、被災地巡礼と松本さんのお話を聞かせていただきました。はじめに新地町にあるがん小屋仮設住宅の支援拠点で、松本さんから震災当時のこと、そして震災から5年間のことをお話していただきました。お話の中で一番印象に残ったことは、原発の関連死が増え続けているにもかかわらず、全国の報道では伝えられていないことです。私は、今まで地震や津波で亡くなった方がいたことしか知りませんでした。しかし、それだけではなく、原発の避難指示によって移動したことによって亡くなった方がいることをはじめて知りました。このことは全国的には報道されていませんが、現地の方が思っているようにきちんと公表して、もっとたくさんの人にこの事実を知ってもらい、原発をなくしていくことが必要ではないかと思いました。

巡礼では、津波にあったふじ幼稚園旧園舎や液状化によって取り壊された教会跡地などを巡礼させていただきました。ふじ幼稚園旧園舎では、津波がきた時のことや、園長先生の思いをお話していただきました。津波がきた時のことを聞いて、私は、もし自分がその場にいたらどうしていたかと考えました。自分がその場でしっかりしてられるか、先生や子どもが亡くなっていく隣で生きている子どもを元気付けることができるかなど、松本さんのお話を聞きながら色々考えました。実際に、園バスの倉庫だった建物には津波のあとが残っていました。その高さを見て、子どもたちは、どんなに怖い思いをしたのだろうと思いました。

2日目は、ふじ幼稚園で劇を上演してから移動して、勤労青少年ホームで茶話会をしました。当初の予定では、午前中は茶話会をして、午後は学童保育にきている子どもたちと遊ぶ予定でした。しかし、台風の影響のため、引率の先生方の判断で2日目に名古屋に帰ることになりました。前日に、幼稚園を巡礼している際、ふじ幼稚園の園長先生とお会いすることができ、急遽予定を変更することができました。園での劇の上演は、担当の学生が考えた台本をもとにみんなで練習をしてきたおかげで、無事に成功に終わりました。園の子どもたちも笑顔になってくれたので、私も笑顔になりました。

劇の後で、子どもたちが園で作った「ひまわりおやくそく」という歌と、震災後に作られた新しい園歌を歌ってくれました。どんな気持ちでこの歌を作ったのだろうと思いながら聞いていました。最後に子どもたちが「笑顔広がれプロジェクト」の合言葉を言ってくれました。その言葉で我慢していた涙が流れました。そのあと劇の片づけをして、茶話会へ向かいました。茶話会では、歌を歌ったり、参加された方々とお話をしたり、アロママッサージをしたりしました。アロママッサージをさせていただきながら、震災のお話を聞かせていただきました。私がマッサージをしながら話をうかがった方は、原発の影響で避難してきた方でした。政府のやることはわからない、家では一人だから、みんなと会えるこういった場所があることがありがたいとおっしゃっていました。アロママッサージをしたあとに、マニキュアをさせていただきました。みなさんきれいになったと喜んでくれていました。

短い時間でしたがお話やみなさんの笑顔を見て茶話会ができて参加したみなさんに出会えてよかったと思いました。

今回初めてボランティア活動に参加させていただいて、今まで知らなかったことを学んだり、保育者として何が必要でこれから何を学ばなければいけないのかについて、気づくことができました。今回私たちが考えていた学童での活動はできなかったけれど、子どもたちがどうしたら楽しんでくれるかを考えながら計画したことは、これから先に活かしていきたいと思いました。また、今できている当たり前の生活に感謝し、もしものことを考えなければいけないなと思いました。



昨年との相違点、これからの想いについて

学籍番号：27C19 氏名：田中 美帆

「え、すごい…。」

仙台駅に到着した後、新地町に向かう車中で発した一言だ。昨年に引き続き2回目の参加になるが、今年、この景色を見るまでは昨年の印象が強かったためとても驚いた。昨年は、電車の線路工事が途中であったこと、港近くの高台から見下ろすと草が生え、どれくらいの間このままになっていたのだろうと思った土の山がそびえ、道路の脇は更地であった。ところが今年には駅が完成し、常磐線の開通も間近だと思われるほど工事が進んでいたことに加え、至る所に住宅が立ち並んでいた。また、放射線量が減少したこと、仮設住宅が新地町内8ヶ所から2ヶ所になっていたことも違いの1つである。松本善さんの話の中で「状況も変わればニーズも変わる。」という言葉があった。上記でも述べたように震災から5年5ヶ月が経ち、震災当時と比べると町の様子など状況も変わってきているため、私たちのように遠く離れた場所から支援する人として考えなくてはいけない。外側をよく見るのではなく、内側つまり気持ちの面ストレスを抱えている人たちへの支援も必要であると思う。

被災地に滞在する間、私たちは、茶話会と、ふじ幼稚園訪問の2つの活動を行うことができた。

茶話会。事前から準備を進めていく中で何をすると喜んでいただけるだろう、歌はどんな曲を知っていて一緒に歌うことができる曲は何だろうかと難しく、試行錯誤を繰り返した。茶話会当日。色々なことがあり、現地の方々とお話す時間は短かった。しかし、アロマオイルマッサージ、マニキュア、手作りのお弁当やコースターをいただき、人の温かみを感じた中身の濃い時間であった。アロママッサージでは、1対1で地震当時のこと、現在の生活についてお話を聴くことができ、愛知県で何不自由なく暮らせることがどれだけありがたいかということも思った。また、最後の挨拶の中で「地震が起こったことは悲しいけれど、地震があったからこうしてこの（茶話会での）出会いがある。」「生きている限り色々なことがあるし、色々なことをする。」と被災地の方が仰っていた。確かにと思ったと同時に、過去の悲しい出来事を消すことはできないが、未来の楽しい出来事に向かって歩み進めているということを感じた。

ふじ幼稚園。1日目の巡礼の中でふじ幼稚園の旧園舎に行き、次の話を聴いた。冬の寒い夜、2人の幼稚園の先生は歌を歌うことや、体をさすり次の日を迎えようと頑張っていたが、1人は亡くなってしまった。その場にいたもう1人の先生は、同じ職場で働く人、子どもたちが亡くなっていくの

を目の前で見なければならなかったが、子どもたちのために留まり続け、移動した新しいふじ幼稚園に今も勤めているという。このお話を聴き、さまざまな感情が自分の中にあふれてきた。

自分も将来、南海トラフがいつか発生すると言われていたため、地震や津波対策をしておかなければならない。愛知県の尾張地方も0メートル地帯が広がっている。高台のような高さがある場所、津波が襲うならばどこから襲ってくるのかを知り、この先生のように子どもたちのことを守っていかなければならないと思った。また、そのためには日頃の訓練、先生同士の連携を計画立てておくことも必要であると感じた。

そして、2日目は、このふじ幼稚園の新園舎を訪問し、子どもたちと先生方の前で『ぐりとぐら』を演じた。本番では、練習以上のことができたと感じた。その後、幼稚園の子どもたちから手話付きの歌のプレゼントがあり、歌詞に込められた想いに胸にこみ上げてくるものがあった。震災時に生まれた子どもは年中さんになり、年長さんも覚えていないだろう。この出来事の記憶を忘れず、次へと伝えていくべきであると思った。



二度目のボランティア

学籍番号：27C22 氏名：中村 努

2011年3月11日の大震災から5年と5ヶ月が経った。大きな揺れと巨大な津波が襲った日からもうそんなにも時間が過ぎたのかという思いと昨年見た復興途中の町や仮設住宅や茶話会で出会った人のことを思い出しながら3月11日の追悼式典の放送を眺めていた。そして今年もボランティアに参加した。

相変わらず賑わいをみせる仙台駅から車に乗り新地町へ足を運ぶ。海沿いに行くにつれ建物は無くなり田んぼや畑が増えていく。このあたりが津波の被害を受けたことを示す「東日本大震災津波到達区域ここから」という標識も同じように増えていく。その周辺にも新しい道路ができていく様子や、家や公共施設が建ち始めている様子を見ながら、日本聖公会の支援センターのある仮設住宅「がん小屋」に向かった。1年ぶりの景色が目の前に広がる。新しい生活を始めた人も多くおり、仮設住宅の入居数は減っていた。新地町には震災当初がんと小屋を含め8カ所の仮設住宅があったが、現在は2カ所のみになっている。その2カ所も今年度をもって閉鎖となるそうだ。しかし今でも40世帯100人ほどが仮設住宅で生活している。がん小屋で1時間ほどレクチャーを受け、震災の傷跡が残る場所へ巡礼に向かった。

津波でお墓が流されたあと、昨年ようやく完成した新しい墓地がある場所には、震災前の墓石も一緒に置かれ供養されていた。亡くなった人たちの繋がりを絶やしたくないという強い思いが感じられた。その中には幼稚園の先生も含まれていた。その先生が勤めていた旧ふじ幼稚園園舎、花やお菓子は新しいものが置かれ、千羽鶴の数は昨年よりも増えていた。花壇に立てられた13本の風車は静かに回っていた。5年以上が経ったこの場所は、当時の時間をとどめている。車よりも高い2メートルを越える津波に襲われ、濁流の中、懸命の救出が行われた。

巡礼中に、偶然ふじ幼稚園の園長先生が旧園舎に來られて、挨拶をすることができた。最後に聖歌を歌い黙祷をして旧園舎をあとにした。1年前にも通ったことのある道を進みながら感じるのは工事車両が減ったこと、ゆがんだガードレールがなくなり着実に復興へと進んでいる光景だった。その象徴でもある常磐線の線路も今年中の再開を目指し工事が進められていた。巡礼の最後は磯山にある教会跡地へ向かった。教会は危険建造物に指定され取り壊されたため今は残っておらず地盤沈下の痕跡が残る階段と教会があったことが書かれた祈りの碑だけだった。教会が建っていた高台からは海が見えだいたい距離があるように思えた実際に教会付近まで津

波が来たようだ。家もあまり建っていなかったが、震災前の写真を見せてもらうと、そこには町があった。

2日目は台風の影響もあり午前中で活動終了と知らされた。しかし、ふじ幼稚園のはからいで活動をさせていただけることになり、学校と前日の夜に準備した劇を披露することができた。劇のお礼にと先生と子どもたちから「ひまわりおやくそく」「園歌」の2曲を歌って頂いた。歌詞にあるようにビクスマイルで歌う子どもたち。聞いているうちに涙が出ていた。

プログラム最後はチームパティシエで毎月お菓子を届けている茶話会に参加した。

会話や一緒に歌を歌うなど同じ時間を過ごす中で震災の話聞いた。未だ家族が見つからない方や目の前で家族を亡くされた方は涙を流しながらそのことを伝えてくださった。また、震災で失ったものも多いが得たものもあると教えていただいた。それは人との繋がりと saying。震災前は近所なのに話したことがなかった人と繋がれたこと、あなた達に会えたこともその一つと saying。とても嬉しく思った。お別れの時にはまた来てや、お菓子楽しみにしていますと saying。元気をもらった。

遠く離れた場所でも思いは伝わり、繋がっていることを心にとどめ帰路についた。

5年5ヶ月が経っても復興が終わっていない現状、原発の影響のこと少しでも多くのことを周囲に発信できるようにするとともに、現地との繋がりを絶たぬようチームパティシエとしての活動盛りあげていきたい。



ボランティアを振り返って

学籍番号：27C28 氏名：広田 茜

私は、今回初めてこの東北ボランティアに参加しました。東北へ行くまでは、学校での準備があり、私は学童保育での取り組みを担当しました。年齢幅が広く、どのような遊びを取り入れたら小さい子から大きい子までが楽しめるのかということを考えることにグループみんなで苦戦しました。東北では台風の影響で学童保育はできませんでしたが、仲間と一から考えることで、全員が意見を出し合うことができ、改善点などを共有することでよりよいものが出来上がっていくということを実感できたように思います。

そして、東北ボランティア1日目を迎えました。まずは、新地町にあるがん小屋へ向かったのですが、行く途中には震災の時のまま家が残っていたり、放射線量を測るための測定機器があったりと、復興が進むなかでも大きな震災がこの東北を襲ったという事実を突きつけられたような感じがしました。その後、がん小屋で松本さんから新地町の現状についてお話を伺いました。5年前の3月11日に地震や津波が起きたときのことは今でも鮮明に覚えています。震度6という地震は、私が住んでいる三重県にまで伝わるような大きな地震で、家に帰りすぐニュースを見てみると、家はほぼ崩れており、津波に流されている人々の姿がありました。そこまで酷かった震災でしたが、今では仮設住宅に入居している人も減り、段々復興に向かっていくのだと思いました。ただ、放射能などの影響で今もなお亡くなっている方が増え続けていることを聞き、私にはどうすることもできないのだということに心が痛みました。

被災地巡礼では、4か所を見させていただきました。その中でも一番印象に残っているのは、ふじ幼稚園で子ども11人と保育者1人が津波の犠牲になったというお話です。車庫に残っていた津波の跡をしめす線を見たとき、想像をはるかに上回った高さでした。そんな中、保育者の中曽順子さんは津波に飲みこまれながらも必死に子どもを守り、救助を待って夜を過ごす中で亡くなりました。園内に残された折れ曲がったのぼり棒や穴の開いた壁、割れたガラス窓などは、震災の威力をものごとっていました。13本のかざぐるまを見たとき、言葉が何も出ませんでした。震災が起きた日は園長先生は園にはいなかったということを知り、大きな責任感や

悲しみ、苦しみを抱えて今まで過ごされてきたのだろうと思うと、とても胸が苦しくなりました。私自身が今のまま保育者になり、震災が起きたときには、実際どうすれば良いのか分からなくなると思います。しかし、震災時に保育者の方がバスの中で少しでも子どもを安心させられるようにと歌を歌い続けたように、一番に子どものことを考えて、守られているという安心感を与えたいと強く思いました。いかなる場合も子どもの命を最優先に考え、もし震災が起きたときに最低限の対応がとれるように考えておかななくてはならないと学びました。

2日目には、新園舎のふじ幼稚園と勤労青少年ホームへ行きました。ふじ幼稚園では、園児にむけて「ぐりとぐら」の劇を行い、成功したときにはとても大きな達成感がありました。子どもたちも笑顔で楽しそうに見てくれていたので、時間がない中、みんなで頑張った良かったと思いました。そのあと、園児が手話をしながら歌う姿や言葉を聞いて私は涙が溢れました。歌詞ひとつひとつの言葉が心に響き、元気で笑顔いっぱいの子供たちを守り続けていきたいとその時強く思いました。

また、勤労青少年ホームでは茶話会に参加させていただきました。震災で親族を亡くした方や、まだ親族が行方不明だという方がいらっしゃいました。その方々の涙を見た際に、本当に辛い苦しい思いをしたのだということが分かり、5年経って周りの支えなどがあつたからこそ今笑顔でいられるのだと思いました。これ以上、大きな震災は起きてほしくないと感じた時間でした。

東北での時間はあつというまで、本来ならば私たちがみなさんに笑顔を届けるはずのところ、逆に東北の方々から強い気持ちと笑顔をいただいたように思います。以前まで些細なことで落ち込んだり諦めたりしていたけれど、ちっけなことなんだと感じました。いつ東海地方で大きな地震が起きるかは分かりませんが、起きたときには子どもたちを守るような強い心を持った保育者になりたいです。そして、またどこかで困っている方々がいたら、支えたい、力になりたいと思いました。東北ボランティアを通して改めて保育者になりたいと強く思えた2日間でした。

ボランティアを振り返って

学籍番号：27C29 氏名：藤田 美来

私が今回のボランティアに参加したのは、実際に現地に行き、被災された方へ何か少しでも自分にできることをしたい、テレビで放送されている映像や新聞などからではわからない被災地の今の状況を直接自分の目で見たい、と思ったからです。

8月28日から2泊3日の日程で東日本大震災復興支援ボランティアとして東北へ向かいました。

1日目、8時42分に名古屋駅を出発し、東京駅で乗り換えを行い、12時16分に仙台駅へ到着しました。その後、レンタカーに乗り、「センターしんち・がん小屋」へ向かいました。そこで、スタッフの話を伺いました。

新地町に計8カ所あった仮設住宅は、現在、集約されて「小川北原」と「がん小屋」の2つだけが運営されています。しかしこの2つの運営も、3月31日に終わりを迎えるそうです。このがん小屋を訪れるのは最初で最後となり、さみしく思いますが、多くの方が自分の家を持ち生活することができると思うと、復興が進んでいると実感でき、嬉しいことなのだと考えました。

その後、センタースタッフの案内により、新地町、山元町の被災地巡礼を行いました。そこでは当時の被害の状況、被災者の方の様子がわかり、心を打たれる場面が多くありました。その中でも、特に心に残るのがふじ幼稚園での話です。実際にふじ幼稚園の旧園舎へ足を運び、当時のまま残っている姿を目にしました。

ふじ幼稚園では、震災当日は卒園式の練習日であり、地震発生時刻はちょうど送迎時だったそうです。立ってられないほどの揺れ。泣いたり叫んだりする子も多かったといえます。そんな中で、教師たちは子どもたちをなだめ、全員を園庭に集めたそうです。

命がけで子どもたちを守ろうとした保育者の話を伺い、同じ職業を目指すものとして、自分ももしその場にいたら同じような行動がとれたのだろうか考えさせられました。保育者は、子どもの命を預かり守らなければなりません。命を守ると言葉では簡単に言いますが、もしもの事態が起きた時、どう対応するべきなのか、普段から考えていくべきだとふじ幼稚園での話を聞いて感じました。

2日目は大きな日程変更がありました。茶話会に参加し学童を訪れる予定でしたが、台風の状況により、その日のうちに名古屋に帰らなければならなくなったのです。その日予定されていた学童への訪問は中止となり、短時間にはなるけれども、茶話会と、3日目に予定されていたふじ幼稚園での出

し物をその日の午前中に行う事になりました。

最初にふじ幼稚園へ向かいました。私たちが準備してきたのは、「ぐりとぐら」の大型ペープサート。みんなで一生懸命練習し作り上げた出し物。楽しそうに見てくれている子どもの姿を目にして、私たちの活動で子どもたちを笑顔にすることができ、この場で披露できてよかったと思いました。そして、子どもたちから歌のプレゼントを頂きました。「ひまわりおやくそく」と「ふじようちえん えんか」の2曲。

「ひまわりおやくそく」は、震災で亡くなった女の子と、ふじ幼稚園の子どもたちが、ひまわりを育てる中でお互い心を通わせている姿が歌詞にこめられています。この歌はふじ幼稚園で大切に歌い続けられており、防災を呼び掛けているそうです。たくさんの思いが詰まっており、子どもたちからたくさんの元気をもらいました。

次に茶話会の会場へ移動し、私たちが用意してきた歌と一緒に歌い、また、オイルマッサージを行いました。お菓子を食べながら会話を楽しみ、時間が過ぎるのはあっというまでした。高齢者の方々が、私たちが来ることを楽しみにしてくれていたことをとてもうれしく思いました。一緒に歌を歌ったり会話をすることで、皆さんの笑顔を見ることができ、オイルマッサージを喜んでいただいて、皆さんのために私たちができることもあるのだと実感できました。

今回は台風の影響により予定通りの活動が行えず、慌ただしくなる状況も多くありました。しかし多くの方々の笑顔を見ることができたこと、自分にもできることはあるとわかったこと、実際に現地に行ってみないとわからない多くのことを知り、学ぶことができたので、本当にボランティアに参加できてよかったと思います。

被災地に到着してまず思ったのが、「建物もあり町がきれい」、ということでした。地震から5年の月日がたち、地震の面影はあまり感じられませんでした。しかし今もまだ当時のことで大きな傷を心におっている人は多くいらっしゃいます。

これから時間がたち、東日本大震災のことを人々は忘れていくかもしれません。しかし大地震は私たちの住む東海地方にも、いつ起きてもおかしくないといわれています。私は、これからも自分に関係ないことと思わず、今回学んだことを忘れず、また、何かできることがあれば支援していきたいと思います。

ボランティアを振り返って

学籍番号：28A05 氏名：市川 倭

今回、私は今年の夏休みに1泊2日の東北ボランティアに参加して、多くのことを学ぶことができました。東日本大震災から5年経った被災地の現状を自らの目で確認することができ、私たちは今、なにをすべきなのだろうと考えさせられました。

1日目、現地に到着した後、車で福島県の仮設住宅へ向かい、センターしんちの松本さんから東日本大震災が起こった当時の様子や、震災から5年たった現在の被災地の現状などのお話を聞きました。松本さんからのお話を聞いている中で、私をもっとも疑問に思ったことは、新聞などに載っている亡くなった方々の人数と実際に亡くなった人の数に違いがあることでした。新聞に載っている亡くなった方々の人数は、震災での直接死の人数しか載っておらず、それ以外の関連死の人数は全く載っていないということを知り驚きが隠せませんでした。そして、自然と怒りがこみ上げてきました。しかし、全ての人数を載せない明確な理由を聞きそびれた自分にも、怒りがこみ上げてきました。

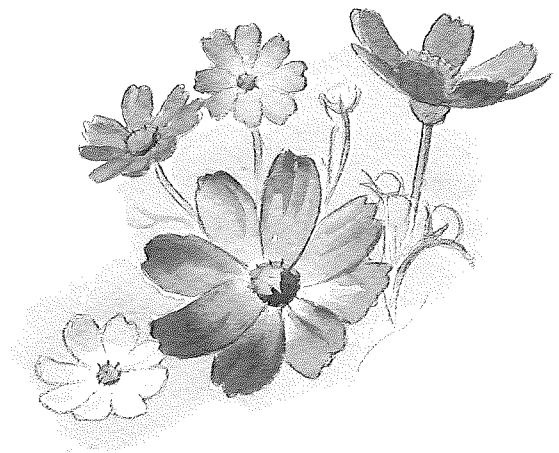
松本さんのオリエンテーションが終わった後は、被災地巡礼として磯山聖ヨハネ教会跡地とふじ幼稚園の旧園舎をまわりました。幼稚園では、自分の身長より高いところに津波が到達した痕跡があり、驚きました。ここでは園児を必死で守る先生方のことや寒く劣悪な環境に避難している園児たちを元気づけるために寝ずに歌を歌い続けたこと、園舎内にある花壇においてあるお地藏さんと風車のことなどのお話を聞いて、涙がとまりませんでした。私はそのお話を聞いて、私もふじ幼稚園の先生方のような素晴らしい先生になるために今後の学校での学びを1日も無駄にせず、少しでも早く先生方に近づけるように必死に努力しようと気持ち入れ直しました。

1日目の夜、台風が近づいてきていることを知り急遽、2日目の予定変更のため夜遅くまで先輩方と2つのプランを考えました。最初は急な予定変更だったため無理だろうと1人で勝手に思い込んでいましたが周りの人たちを見ると全員が次の行動に切り替えていかに自分が気持ちの問題で弱いかが分かりました。保育者になるにはこの程度でめげてはなれないので自分も予定が変更になってもすぐに切り替えられる能力を在学中に身につけて立派な保育者になりたいと思います。

2日目は、当初の予定を変え最初に茶話会の準備を行いました。限られた時間しかなく自分も与えられた仕事をこなすことがせき無事、準備が終わりました。そして、すぐにふじ

幼稚園に向かいました。ふじ幼稚園では、「ぐりとぐら」のペープサートを行いました。1人1人が自分の役にはいって真剣に演技したためミスすることなく終えることができました。園児たちも笑顔になってくれて、その笑顔を見た私たちは元気をもらいました。最後に園児たちが2曲、私たちに歌ってくれました。終わった後、すぐに茶話会の会場に移動しました。そこでお菓子を食べながら歌を歌ったりしました。オイルマッサージを行いながら現地の人達のお話を聞くことができました。

この1泊2日の東北ボランティアに参加して思ったことは、まだ仮設住宅に人が住んでいること、5年経っても前と同じ生活ができていない人がいることを知り、地震と津波の恐ろしさを改めて理解することができました。そのような事実は決して忘れてはいけないと感じた。福島県以外の方にも知っていただいて少しでも早く5年前にしていた生活に戻れるように応援してほしいです。私はこの東北ボランティアで学んだことを忘れることなく自分の次に進むべき道へと役立てていきたいと思いました。



ボランティアを振り返って

学籍番号:28C08 氏名:海原 佳奈恵

2016年8月28日～8月29日に東日本大震災 復興支援ボランティアに参加しました。東日本大震災が起きた直後、私も何か力になりたいと思って被災地に行き参加することができず、被災地の映像を報道番組で見て、大変なことが起きていると感じることしかできませんでした。5年が経ち、大学でボランティアがあると知り、自分にも何かできるかもしれないと思い参加を決めました。

ボランティアに行くまでの準備期間では、限られた時間の中でグループに分かれ活動しました。私は茶話会のグループでした。楽しい時間を過ごせるようにと、歌やレクリエーションの案を出し、考えました。ボランティアの活動の流れが分かっている、活動の様子は想像できませんでした。

1日目、台風の影響を心配しながら出発しました。仙台駅からセンターしんちのがん小屋仮設住宅に向かうまでの道を見て、新しい家や病院などが経ち、きれいだなと思いました。しかし、津波の到達を示す看板や、何もたっていない場所を見ると、なんとも言えない気持ちになりました。

がん小屋に到着してから、仮設住宅の中で東日本大震災の被災状況やこれまでの支援プログラム、仮設住宅についての説明を受けました。その説明の中でも印象に残ったのは、震災の影響はずっと続くということです。震災の直接死ではなく、関連死で亡くなったの方が福島県では多いです。関連死とは、放射線の影響や、避難先でストレスや病気が悪化して亡くなるケースが含まれます。関連死は今もなお増え続けています。名古屋では見かけませんが、福島の地元の新聞には毎日県内死者数が掲載されるそうです。

そのあとに被災地巡礼にいきました。東林寺の慰霊碑、旧ふじ幼稚園の園舎、教会跡地に行きました。ふじ幼稚園の園舎で説明を受け、聞きながら当時の様子を頭の中で想像しただけでとても怖い気持ちになりました。その場にいた方は、わたしの想像を超えた恐怖と焦りでいっぱいであったと思います。寒い夜に、津波によって流されながらバスの上で子どもたちを落ち着かせるために一晩中うたを歌ったそうです。誰もいない旧ふじ幼稚園の園舎では、とても寂しそうでした。壁には、津波が来た跡が残っていたり、ガラスの破片が落ちていたり、二つに割れ壊れた携帯が置いてありました。

二日目は、ふじ幼稚園、茶話会に行きました。

ふじ幼稚園では大型ペープサートを上演しました。予定を変更していたので、発表が上手くいくか心配していましたが、そのあとの子どもたちの元気な歌声や笑顔に元気をもらいました。

茶話会では、全員で歌をうたい、ハンドマッサージをしました。ハンドマッサージをしているときに、その方から震災が起きた当時の話をしていただきました。5年経ってからも全て鮮明に覚えているそうです。目の前で自分の友達が「助けて。助けて。」と言っても助けることが出来なかった。次の日にその場所に行ったら冷たくなっていた。今も夢で「助けて」とフラッシュバックするそうです。自分の家族には、心配をかけてしまうから話せない当時のこと、苦しいと思っていることを、涙を流しながら話してくださいました。わたしは、とても想像できなくて、こわくなって、あいづちしか打てませんでした。その方が何度もおっしゃっていたのは「自然には人間は勝てない。震災、津波の恐ろしさを忘れないで欲しい」ということです。わたしは「帰ったら、必ずまわりの人に伝えます。」と言いました。

今回のボランティアで学んだことは、臨機応変に対応することの大切さです。ふじ幼稚園での先生方の子どもたちを落ち着かせるために歌をうたうことのように、どのような場面でも状況判断をしっかりと行行動することが、いかに大切かを知りました。また、ボランティアもその時のニーズに合わせ、判断し行動することが重要だと思いました。そのためには、準備が必要です。何かが起きてからではなく、起きる前に、判断の材料となるような知識を蓄えたいです。



ボランティアを振り返って

学籍番号：28D05 氏名：伊藤 理花

今回の東日本のボランティアに参加して「知る」ことの大切さと、学校と現地のつながりの深さを感じました。私が東日本のボランティアに参加したいと思った理由は、自分の行動が少しでも誰かの支えになりたいと思ったからです。しかし、実際に行ってみて、逆に自分自身を見つめ直すきっかけになりました。

1日目はがん小屋という仮設住宅へいき、ボランティア・スタッフの松本さんから現在の被災者の状況を聞きました。震災から5年5か月経った現状は、被災者の心理状態のケアの重要性、子供や障がい者、現地に住んでいる外国人など日頃、谷間におかれがちな「被災者弱者」の存在、放射能の中でも報道格差がある事実、など知らなかったことが沢山ありました。

現地での交通手段は車でした。道路を通っていると、新築が並び、JR常磐線の駅が今年の12月に運行開始などやっとなり日常が戻りつつあるのかと思っていました。しかし、辺り一面田んぼのような緑が広がっている場所もありました。私は初め、ここは田んぼが多い場所と勘違いしていましたが、5年前には家が沢山あり、津波で流された場所でした。たくさんの方々の家庭の幸せを一瞬で一気に消し去ってしまった津波の恐ろしさと、流されてしまった家庭を思うと苦しくなりました。新しく直したとしても心は簡単には立ち直ることは難しいと思います。被災者の方々にとっての5年5か月と、私の5年5か月は全く違う気持ちであり、震災は場所が違っただけで、自分にも十分に起こりうることと感じました。

2日目は茶話会と、ふじ幼稚園へ行きました。茶話会でいらしていた参加者の方々のお話で印象に残っているのが、「震災に遭わなかったら出会ってなかった。」という言葉です。震災前の家では隣同士でも関わりが無かったが、震災に遭ってから茶話会を通して深い関わりになったとおっしゃっていました。また、学校で活動しているチーム・パティシエや、私達に対しても「これも縁ですね。ありがとう。」と感謝の言葉をかけていました。震災当時の苦しさを経験がない私にとってはどれだけ苦しかったのか想像しかできず、どう言葉掛けすればいいのか分かりませんでした。ですが、茶話会の参加者の方々には私達が企画したハンドマッサージやネイルをしてとても楽しんで下さいました。なかには私達の分のお昼を用意して下さった方もいました。皆さんの言葉掛けや表情を見て、私は心も体も温かくなりました。このことから、誰かのために、と考えるのではなく、一緒に楽しんだり、考

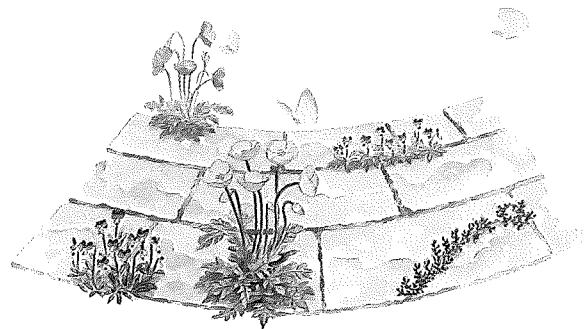
えたりすることが大切なのではないかと気づきました。

ふじ幼稚園では「ぐりとぐら」の劇を発表しました。台風の影響で、発表が前倒しとなり、内容を少し変更しました。その時の先輩方の臨機応変さや、子ども達に分かりやすく、楽しんでもらうためにどうするかを真剣に向き合っている姿をみて、自分の担当であるピアノを精いっぱいやろうと思いました。発表は無事終わり、子供達にも楽しんでもらったので嬉しかったです。今回の発表を通して、一人ではできない達成感を知りました。また、先輩方の行動も勉強になりました。

ふじ幼稚園は震災後新しい場所で子供達を保育しています。交通が多い場所で、決して環境の良い場所ではありませんが、それでもふじ幼稚園の先生方は毎日子供達を守り、成長を導いています。震災に遭った旧ふじ幼稚園は今もそのままの状態に残っており、私達も現地を見に行きました。亡くなった13名の先生と幼児を忘れないという思いから亡くなった幼児の一人であるひな乃ちゃんのご両親と園長先生が作った「ひまわり おやくそく」を最後に園児が歌ってくれました。

歌を聞きながら、旧ふじ幼稚園の出来事や、当時の子供達はどんな毎日を過ごしているのか、園長先生や先生方の当時の心境を思い浮かべていました。胸が締め付けられるような気持ちでしたが、子供達や、先生が楽しそうに歌っている姿に心が温かくなりました。

今回の経験は特別なものとなりました。「知る」ことによって自分の知らない世界を見ることができました。また、私達が東日本ボランティアに参加できたのは学校が毎回、被災地と交流していたことによる深い絆があることも知りました。関わっている全ての方に感謝をしたいと思います。



東北ボランティアから学んだこと

学籍番号：28D18 氏名：木村 マリ

私が東北ボランティアに参加し学んだことは、震災から5年が経過した今も苦しんでいる方々がおられるということです。今ある日常の生活を当たり前と思わず、大切にしなければならぬと感じました。そして、もし自分たちが震災に襲われたとき保育者として何ができるか考えなければならぬと実感しました。

震災から5年経った今もなお、仮設住宅で暮らす方や、関連死、家族の行方が分からず、心に大きな傷を負っている方が多くいます。被災地の見た目は復興しつつあります。しかし、こうした心の傷をなくすことは大変難しいことだと思います。だからこそ、私たちはボランティアを通じ、被災者の方の心の傷が少しでも和らぐよう支援しなければならぬと思いました。

今回、茶話会で実際に津波の被害にあわれた方の体験談を聞く機会がありました。その際、「津波で全て流され、大切な人も、ものも全部失ってしまった。残っているのは私の心の中にある思い出だけ」というとても辛い話を聞きました。話してくださった方は、本当は思い出すのも辛かったと思います。しかし、この事実を伝えることで私たちに少しでも多くのことを感じ、今後の生きる力にしてほしい。という思いで伝えてくださったのだと思います。だからこそ、私たちはこのような被災された方の経験や、思いを受け取り、少しでも多くの方に伝えなければならず、更にもし自分たちの身に起きたら、どうしなければならぬのかを考えなければならぬと強く思いました。

そして、辛い思いをされた方のために、私たちにできることは何か考えなければなりません。私は今回のボランティア活動を通じ、一番大切なことは心のケアだと思いました。辛い体験をし、5年経った今も当時の事が昨日のことのようによみがえり、忘れることができず、苦しい思いをされている方々に、手作りのものを贈ることや、側に寄り添う人の存在があることで心が励まされ、苦しい過去を乗り越え前向きに生きる力になると思います。

また、旧ふじ幼稚園を訪れ当時の先生方の救出劇を聞き、子どもの命を守るという保育者の責任の重さと、自分を犠牲にし必死に子どもの命を守ろうと奮闘した先生方の行いが、子どもの命を守ったということを知りました。そして、最善を尽くしたにもかかわらず、命を落としてしまった園児がいるということも知り、全員の命を守ることがいかに大変なことなのかを知ることができました。

私は、今回参加したことにより、ボランティア活動において必要なことは、見た目の活動だけでなく心の支援も必要だということと、今も震災の被害は続いているということを実際に被災地を訪れたことで実感しました。また災害時の対策を今の段階で考え、備えておくことの必要性も感じることができました。

そして、今当たり前前に過ごすことができていることに感謝し、今を大切にしなければならぬと思いました。今回のボランティア活動に参加することができたこと、また私たちのボランティア活動を支えてくださった方々に感謝し、今後の活動に最大限生かしていきたいと思います。



ボランティアを振り返って

学籍番号：28D37 氏名：新美 佳那

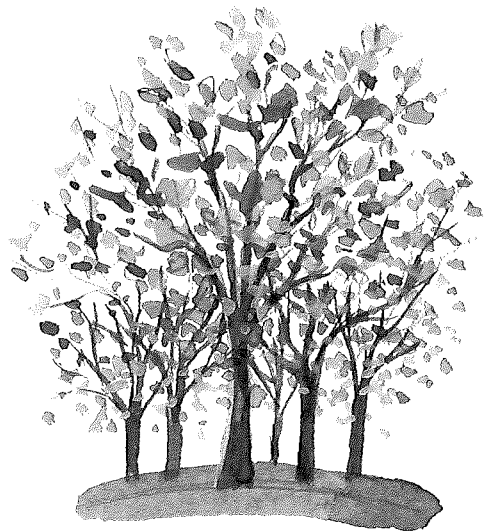
今から約5年前、2011年3月11日に東日本大震災が起こりました。私はその日、インフルエンザにかかっている、家で寝ていました。揺れは感じましたが、気にしないで一日中ベッドの上で過ごしました。次の日、津波で町が流されていく状況や部屋の中のもの激しい揺れで荒れていく様子をテレビで見ました。大変驚いた感覚を今でも覚えています。大学生になった今年、大学でボランティア活動があると聞き参加しようと決意しました。

8月28日(日)1日目。名古屋駅から東京まで行き、そして仙台まで向かいました。仙台駅は、名古屋駅と変わらず多くの人でにぎわっていました。建物や町の雰囲気を見て、5年前に震災が起きたとは思えませんでした。車でセンターしんち・がん小屋に、2時間かけて向かいました。ここでは、仮設住宅の一室で支援スタッフの松本さんから話を伺いました。新地町のプログラムをもとに、震災直後や今の東北の現状を知りました。津波がどれくらいまで来たのか、死亡者・行方不明者のデータを見て、胸が苦しくなりました。一番印象に残ったものは、仮設住宅の話です。1496名の方が仮設住宅で暮らしたそうです。現在では、8か所あったうちの2か所以外は無くなりました。仮設住宅で過ごす人も393人まで減り、来年には残りの2か所もなくなるというお話でした。復興し、5年前のように少しずつ近づいているのだと思う反面、被災にあった方の気持ちはどう変化しているのだろうと疑問に思いました。話が終わると、巡礼をするため各場所を巡りました。実際に被災者の方が避難したところや墓地などたくさんの場所に行くことが出来ました。中でも、ふじ幼稚園の旧校舎を訪れたことが、保育者を目指している私にとって感慨深いものになりました。話の中で聞いた、子どもを思いやる先生に私もなろうと決意しました。

8月29日(月)2日目。この時台風が近づいていて、朝の打ち合せでふじ幼稚園と茶話会に参加したら帰ることに決定しました。まず、ふじ幼稚園で劇を披露しました。子ども達も先生も喜んでいる様子で、嬉しくなりました。劇のお礼に子どもたちが、私たちに歌のプレゼントをしてくれました。その歌は、震災時に亡くなった子どもと先生に送ったものでした。巡礼での話を思い出し、涙が止まりませんでした。また、一生懸命に歌っている子どもたちの姿を見て、5年前のことは忘れずに受け継がれていっているのだと実感しました。そのあと、茶話会へと向かいました。歌を歌い、昼食を一緒に食べました。食べ終わると、私たちは参加している方にオイ

ルマッサージをしました。そこでは実際に被災したときの話を聞くことが出来ました。家族のほとんどを震災によって亡くされた話をしてくださいました。真剣な表情でしたが、オイルマッサージが終わると、きれいになった・ありがとうなど笑顔を見せてくれました。とても前向きで、私が勇気ももらいました。帰り際には、また来てくださいと言ってくださり、帰りたくない気持ちでいっぱいでした。

2日間という短い間でしたが、多くのことを見て聞いて実感することが出来ました。私の中でボランティアは第一に誰かの為に活動することでした。しかし、今回の体験で自分を見つめ直し成長へと繋がる活動ではないかと考えが変わりました。ここで学んだことを、忘れずに将来に向けて励んでいきたいです。



このことをわすれないように

学籍番号：28D46 氏名：森 玖瑠実

東日本大震災から5年と5ヶ月が経ち、私は初めてボランティアに参加しました。今回のボランティアは、台風の影響により2泊3日の予定が1泊2日になりました。そのため、準備したことを全部やることはできませんでした。しかし、とつても濃い時間を過ごすことができました。

1日目、期待と不安を胸に抱きながら最初に向かったのは、「がん小屋仮設住宅」でした。その仮設住宅の小さな一室で、松本さんからレクチャーを受けました。8カ所あった仮設住宅は、復興が進んでいくにつれて「がん小屋」を含めて2カ所に集約され、残った仮設住宅も、来年の3月31日に閉鎖される予定だという事を聞きました。

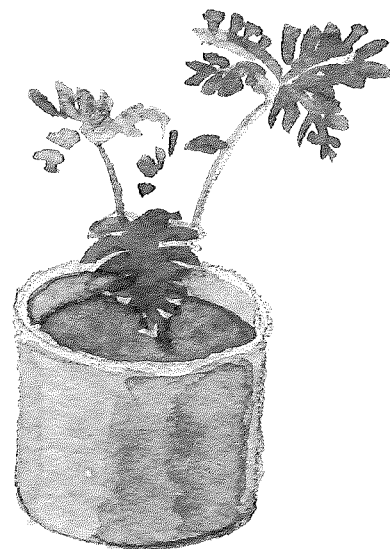
その後、被災地巡礼を行いました。地震による衝撃で倒れて割れた石碑、傷ついた墓石、危険な建物と指定されて解体され、5年5ヶ月経った今も再建されていない教会、それらは、想像を超えるものでした。テレビだけでは、絶対に知ることはなかったと思います。そして、何よりも衝撃を受けたのは、被災したふじ幼稚園です。車庫だった建物には、私の頭の高さよりも高い位置まで津波が来たことを示す痕跡が残っていました。津波が襲って、目の前にいたはずの子どもがいなくなり、やっと津波から避難して救助を待つあいだに、さっきまで生きていた人が低体温症で目の前でなくなっていったと言う話を聞きました。そんな中、園の先生は、ご自分も怖いのに子どもたちを励まし続けるために一晩中、歌を歌い続けたとうかがいました。その姿を想像し、幼稚園の先生という仕事はとても責任のある仕事だと改めて思いました。


2日目の朝には、3日間滞在できないということが決まり、朝から茶話会の準備をして、ふじ幼稚園に行き、準備してきた劇をやりました。子どもたちが喜んでくれて、とても嬉しかったです。劇の後、子どもたちがみんなで、手話を交えながら歌を歌ってくれて、涙が出てきました。時間が短く、園長先生のお話が聞けなかった事が残念でした。ボランティアで来ているはずなのに、私たちの方が、子どもたちの純粋な笑顔と歌声に勇気と元気をもらいました。

ふじ幼稚園を出て茶話会に戻ると、手作りのお弁当と、手編みのレースを作って来てくださった方がいらっシャって、とても驚きました。集まってくださった方と、ハンドマッサージや用意した歌を歌って向き合って話をすることができました。とても短い時間だったにも関わらず、名前を覚えようとしてくれて、会が終わってお別れをするのがとてもさみ

しかったです。

1泊2日になってしまった今回のボランティアでしたが、この活動を通して私が学んだことは、5年5ヶ月経ったいまでも、表には見えない心の傷はいえていないと言うことです。辛い過去を抱えていても人前では笑顔を絶やさない方々の姿を見て、復興はまだ終わっていないと感じました。このことを、わすれないように自分にできることをやってきたいです。何よりも、このボランティアに参加し、改めて被災地の今を知ることができてよかったです。ほんとうにありがとうございました。





平成28年度
名古屋柳城短期大学
ケーキボランティア活動報告書

28D18 田口希美



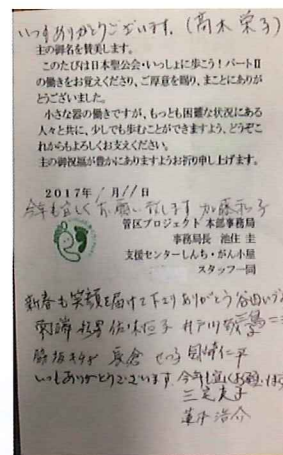
平成29年1月

私達、チーム・パティシエ（ケーキボランティア）の今年1年間の活動内容を以下のように報告させていただきます。

1. 東日本へのお菓子の贈り物

今年度も昨年度に引き続き、東日本にある被災者支援センター「がん小屋」へ手作りのパウンドケーキやクッキーを月に1度贈る活動を行いました。「がん小屋」で行われている茶話会の中で地域の方々がお菓子を食べながら会話を弾ませ、元気に、そして笑顔になっていただけるよう、丁寧に愛情を込めて作らせていただきました。

作ったお菓子を箱詰めする際には、私達の愛情の気持ちをより一層伝えることが出来るよう、手書きのメッセージカードも添えています。茶話会に参加された方々からお礼のお手紙も毎月いただいております。私達もとても嬉しい気持ちになります。この活動を通して、場所は遠く離れていても、気持ちはいつまでも繋がっているのだと改めて感じています。



2. 柳城祭での販売

今年度は11月2・3日に柳城祭が開催され、その中で本校のラウンジにてクッキーとコーヒーの販売を行いました。当日は、学生から大人の方まで多くの方にご購入していただきました。大変ご好評をいただき、お陰様で完売いたしました。また、「がん小屋」の方の気持ちが込められたイチゴのストラップも一緒に販売し、こちらも大変ご好評いただきました。ご購入された際に頂いたお金は、全額東日本大震災の義援金として寄付させていただきました。「美味しかった！また食べたい！」等と、喜ばしいお言葉を多くいただき、チーム・パティシエのメンバー全員、達成感と嬉しさを実感することが出来ました。月に1度お菓子を贈ることとは別に、本校の学生や先生方をはじめ、多くの方の思いが込められたお金を義援金として贈らせていただけるということも、とても幸せなことだと強く感じています。



以上が今年度のケーキボランティア活動報告となります。

東日本大震災 復興ボランティアに参加して

准教授・キリスト教センター 山脇 真弓

東日本大震災に参加して4回目の夏を迎えました。日本中を激震した3.11。

早いもので5年の月日が経過しています。毎年訪れる福島県や宮城県、今年は風景の様変わりを現地で感じました。今まで、遅々として進まない復興の様子や土地開発でしたが、今年の夏は町の様子が変わり、震災の爪痕がほとんど見当たらない風景を感じました。

* 「がん小屋」でのミーティング *



大地震により発生した原発事故、建屋の爆発と放射性物質の流出や汚染、町全体の住民が一斉避難となり仮設住宅での生活。あれから5年が経過していますが、今も放射線量の測定を行い、安全確認を毎日行い基準値で生活できることを確認しながら、保育や社会生活が成り立っているという現状でした。生活が困難と判断した方々は、他府県へ移住したというお話でした。

* 雨の中の被災地巡礼 *

東北の福島に着いた初日、小雨交じりの天候の中、被災地を巡礼しました。

毎年何う「ふじ幼稚園旧園舎」では、施設が震災当時のまま保存され、津波の威力の跡もそのまま残されています。園舎の入り口には亡くなった子どもたちの祭壇が設置され、今年も多くの参拝者とお供え物が飾られていました。ここであった大きな悲しみに皆さんの心が集っている様子を垣間見ることができました。校庭の隅の花壇に飾られた12体の小さなお地藏様と12個の風車を見て、亡くなった子どもや先生を偲びながら手を合わせ涙する学生もいました。



* 旅館での準備 *



明日から始まる日程のために、学生は各担当に分かれ夜中まで準備を行いました。

そんな中、大型台風の接近が予想され、日程の変更を余儀なくされる事態が発生しました。学生たちは、このボランティアのために多くの時間を費やし企画や準備をしてきました。行事を日程通り実施するかどうかについて、この夜も翌朝も、何度も話し合いましたが、最終的には3日目を中止し、2日間で切り上げるという判断に至りました。

* ふじ幼稚園での交流と発表会 *

『ぐりとぐら』の絵本をミュージカル風にアレンジして上演、短時間の物語でしたがステージ発表が始まると、子どもたちのかわいい声援「ぐりとぐらだー」が何度も飛び交いました。



園児からのプレゼントは、全園児による手話を使った園歌を歌ってくれました。そのかわいらしさと一生懸命さに感動して、参加した学生や教員は胸が熱くなり、涙を流す学生もいました。

お年寄りとの茶話会

ふじ幼稚園を早々に失礼して、茶話会の会場に移動し、ケーキボランティアが事前に送っていたパウンドケーキとコーヒーで茶話会を始めました。いつもお手伝いをしてくださる智子ママと和子ママも一緒に食べながら、学生が用意した歌を唄ったり、ハンド・マッサージしたりして交流を深めました。

ここ数年、この茶話会では高齢者の方といろいろなお話を楽しくさせていただいていますが今回、初めてハンド・マッサージを行うことで、今まで一度も聞く事のなかった震災時の体験を、参加者のみなさんが学生に話し始めたのです。

手を握り、マッサージをしながら体の緊張を解していくと、今まで話すことができなかつた心の深い部分を解放したように、感情を込めて、ポツポツと言葉を選ぶように、やさしく、しっかりと話しをしてくださいました。その話を聞いている学生にもその時の情景が浮かぶようで、おばあちゃんと学生は手を取り合って互いに涙をぬぐう姿があり、とても印象的でした。



学童の子どもたちとの交流

今回のプログラムでは、学童の子どもたちとの交流も企画・準備していました。しかし、台風接近のため1日繰り上げたので予定通り実施できず、持ってきたものや学生が手作した玩具、ケーキなどをセンターの方に預けて名古屋へ帰ることになりました。企画した学生のグループは大変残念な思いと心残りではありましたが、後日、学童の子ども達からその玩具で遊んでいる様子や笑顔あふれる写真、お礼の手紙が届き学生が準備したものを活用してくれたことが伝わり、学生達も企画した事がよかったと感ずることができました。

毎年ボランティアに参加し、被災地の方々とふれあうことにより私達自身がかげがえのない温かい贈り物を、毎年いただいていることを痛切に感じています。被災者の皆様にふれあう機会があったこと、そして多くの皆様に出会う事ができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

東日本大震災で被災された皆様へ完全復興の日が早く訪れることを祈念しながら、4年間参加してきたボランティア活動への想いを綴ることにいたしました。

これまでご協力いただきました多くの皆様に、心より感謝申し上げます。

発行日 2017年3月16日
編集 名古屋柳城短期大学 キリスト教センター(宗教委員会)
発行 名古屋柳城短期大学
〒466-0034
名古屋市昭和区明月町 2-54
TEL 052-841-2635(代)
FAX 052-841-2697
印刷 株式会社 日興商会

